

2015.5.21  
vol.39

# シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画  
を  
読む

## 本日の上映作品

### 誓いの休暇



5月21日(木)

① 10:30 ~ 12:00

② 14:00 ~ 15:30

監督：グリゴリー・チュフライ  
脚本：ワレンチン・エジョフ  
グリゴリー・チュフライ  
撮影：ウラジミール・ニコラーエフ  
エラ・サヴェーリエフ  
音楽：ミハイル・ジーフ  
出演：ウラジミール・イワシヨフ  
ジャンナ・プロホレンコ  
アントニーナ・マクシーモア  
製作：1959年 ロシア モノクロ  
上映時間：88分  
日本公開：1960年



ナチスがロシアに攻めこみ、戦争がもっとも苦しかった頃。19歳のアリョーシャは戦場で2台の敵戦車を炎上させた勲功により、6日間の休暇をもらった。アリョーシャの心は故郷へとはやるが、戦火の道中は一層長い。途中、空襲にあたり、妻のもとに復員する傷病兵を助けたりしているうちに休暇はまたたく間に過ぎ去っていく。そしてやっと乗り継いだ軍用貨物列車のなかで、アリョーシャは少女シューラと出会った。

『シネマウォーク インワールドヒストリー 1 通史編』

伊藤 弘成 山川出版社 N 778.0

映画に描かれた史実から世界史を学習するガイドブック。「トロイ」「ブラザーフッド」など新作を25本追加、旧作22本の内容も全面改訂し史実に忠実で、内容・映像的に「時代」を正確に観せる作品47本を厳選して紹介。

『シネマウォーク インワールドヒストリー 3 20世紀編』

伊藤 弘成 山川出版社 N 778.0

映画に描かれた史実から世界史を学習するガイドブック。「アンジェラの灰」「戯夢人生」「13デイズ」「ノーマンズ・ランド」など47本の映画から、20世紀の消された世界史を知る。

『映画で世界を読む』

山田 和夫 新日本出版社 N 778.0

ピアニストはなぜ船を降りなかったか?(海の上のピアニスト)、シェイクスピアが恋におちたのは?(恋におちたシェイクスピア)など思いを巡らせ、新しい発見の楽しみ、面白さを紹介する。

『映画なんでもランキング』

磯野 テツ 彩流社 N 778.0

「映画狂(シネフィル)」とはひと味違う、独断と偏見と「映画愛」に充ちた笑撃の映画ランキング。きまじめなランキングに、おふざけもある、映画という魔法にとり憑かれたふたりの男からの、映画という王への捧げ物。

『「戦争映画」が教えてくれる

現代史の読み方』

福井 次郎 彩流社 N 778.2

ナチによるホロコーストからパレスチナ問題まで、こみいった歴史も映画を観れば驚くほどよくわかる。450本以上の作品を現代史の流れに対応させて紹介。

# 映画を読む

## 『誓いの休暇』

### 『アレクサンドル・ソクーロフ』

みや こうせい 未知谷 N778.2

次々と問題作を撮り、ロシアのみならず世界でも最も注目される映画監督のひとり、21世紀の知の巨人とも称されるアレクサンドル・ソクーロフの等身大をとらえた写真集。写真家は彼と厚い信頼で結ばれている。

### 『タルコフスキイの映画術』N778

アンドレイ・タルコフスキイ 水声社

映画に対する情熱から作劇、演出の実際にいたるまで、現在に遺されたソ連時代の肉声を集成し、「映像詩人」の原点に迫る映画論集。

### 『恋の映画誌』

山田 宏一 新書館 N778.2

1995年10月～96年9月まで『毎日新聞』日曜版に、「ラブシーンのときめき」の題で連載されたものをもとにまとめる。恋のシーンを映画史的に旅して自らの魂の冒険を試み、映画を映画的に、映画の言葉で語る。

### 奥田 継夫 ポプラ社 N778.2

### 『映画で考える学校・家』

学校・家庭で悩みながら成長する10代。人生の先輩として、映画を紹介しながら、児童文学作家の体験をふまえ、友情、生活を語る映画論を超えた人生論。

### 『映画で考える青春・恋』

民族・国を越えて、若者に共通の問題について、様々な角度・方法で迫り続けてきた映画の紹介を通じて、まっすぐ、あたたかく語りかける。

### 『映画で考える戦争』

戦争がない日本だが、世界には戦争にまきこまれていく子供もいる。映画から戦争の本当の姿、カラクリを説き明かし、疎開体験をベースに、ほんとうの戦争の恐ろしさを語る。

## 母が立ち尽くす一本道

今回は反戦をテーマに、ロシア映画史上最も美しくヒューマニズムに溢れた映画といわれるチュフライ監督の作品（日本公開は1960年）です。数年前、友人から薦められて「リぶら」のDVDで初めてこの作品を観て以来、私の忘れがたい映画になりました。

第2次大戦の独ソ戦のさなか、偶然、最前線から故郷へ旅することになった少年兵の6日間の記録を淡々とつづったこの作品。前線の兵士から妻への贈り物を託されたり、片足を失い妻に会うのをためらう帰還兵を励ましたり、汽車の中で可憐な少女に出会ったり。この6日間の旅で大人への切符を1枚1枚手に入れていく彼を、暖かく抱きとめるロシアの心温まる人たちと大地。

数々のエピソードの中で、とりわけ「若い兵士と少女の微笑ましい出逢いと道行き、そして永遠の別れ」と「息子の帰還を聞き、畑の中を一心不乱に走る母、ほんの一瞬の抱擁しか許されず、涙で息子のトラックが遠ざかるのを見送るしかなかった母の姿」の二つの別れがとても切な

く、「この戦争さえなければ……」という思いに胸を締め付けられました。穏やかだが実に巧みな反戦メッセージだと思いました。

ですが同時に、ソ連時代のロシアでよくぞこのような反戦映画ができたのだと不思議になりました。この映画が製作された1959年は、1956年のハンガリーの民衆暴動の武力鎮圧、世界中が核戦争の危機に震えた1962年のキューバ危機などから推察できるように、表面上は東西雪解け時代と言われながら、底流では東西関係が一触即発の状態にあった時代です。当然、映画が国家の監視下にあったはずですが。

調べてみると予想通り、脚本の段階から党の芸術委員会から批判され企画が難航したり、撮影中も色々なアクシデントに見舞われたり、作品完成後も、党中央委員会から「反ソ的、反人民的で軍を批判している」と、チュフライは党から除名され映画も公開禁止となるなど、相当な逆風が吹き荒れたようです。しかし、1ヶ月後にはどういうわけか委員会から条件付きで農村部などで公開が許され、さらに委員会からの命令で今度

は1960年度カンヌ映画祭へ出品、最優秀特別作品賞を獲得という快挙を成し遂げます。

このような背景を頭に入れて、この作品をじっくり味わうと、この作品を生き残らせるためにチュフライが仕組んだいたかな工夫を隅々に発見できます（例えば、冒頭とラストの一本道シーンでのデリケートなナレーションなど）。皆さんも「リぶら」所蔵のDVDで、もういちど深読みしてみたいかがですか。 K.M.





# 未成交響楽



「わが恋の終らざるごとく、この曲も終わらざるべし」

オーストリアの作曲家、フランツ・シューベルトの青春期と、彼の名曲「交響曲第8番短調《未完成》」の制作秘話を描いたラブ・ロマンス。音楽映画、楽聖映画のはしりとなった作品で、劇中のウィーン少年合唱団を使った演出は後に「野ばら」「サウンド・オブ・ミュージック」で再現されることになる。シューベルトの名曲の数々をバックに繰り広げられるプラトニックな悲恋劇は、美しくも切ない。

貧乏暮らしをしていたシューベルトは、ある日侯爵家の演奏会でピアノを弾くことに。後日、彼が家庭教師をすることになったのは、自分の演奏を笑った令嬢だった。本国ドイツでの評判は必ずしもよくなかったようだが、日本では戦前ドイツ映画の代表傑作と認められ、大ヒットした。



監督・脚本：ヴィリ・フォルスト

原作：ヴァルター・ライシュ

音楽：フランツ・シューベルト

編曲：ヴィリ・シュミット＝ゲントナー

演奏：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 / ウィーン少年合唱団 / ウィーン国立オペラ合唱団  
ギウラ・ホルファート・ジプシー楽団

出演：ハンス・ヤーライ / マルタ・エゲルト / ルイーゼ・ウルリッヒ

製作：1933年 ドイツ/オーストリア モノクロ 上映時間：88分

★日時 **6月18日（木）**

① **10:30 ~ 12:00** 開場：10:00

② **14:00 ~ 15:30** 開場：13:30

★場所 **りぶらホール**

★定員 **各回280人**（入場無料・全席自由）

★主催 **岡崎市立中央図書館  
りぶらサポータークラブ**

★問合せ **TEL：23-3114 mail：info@libra-sc.jp**

託児：500円  
（各回5名まで）  
申込みは、  
1週間前までに。



# インフォメーション

## 『巴里の屋根の下』感想

- ・1930年代の作品ですね。昔懐かしいロマンスで嬉しくなりました。昔は素朴でホノボノとします。今は狡猾になりましたね。もっとゆっくり人と関わりたいものです。
- ・昔のパリはあんなに人間味があったのでしょうか？ 私はまだ生まれてないです。でも、面白く、楽しく、美しい気持ちになりました。
- ・無声映画のような映像でなつかしい気がしました。古い映画をたくさんみたいです。
- ・無声映画のようではなかなかよかった！ T.N.
- ・たのしいフランス映画 たんのうしました。88才男
- ・生まれて間もない頃の映画です。また見に来ます。
- ・私の生まれる前に出来た映画、楽しかったです！！ いつもありがとう。
- ・1930年代のパリが深く描かれていました。女心は難しい。
- ・古きよき時代のパリ、本当にいい映画でした。
- ・昔のパリの街角も服装もおしゃれでびっくりしました。
- ・意外な展開、能トレになりました。
- ・ラブ・コメディというのか、とても面白い映画でした。音楽も良かったです。
- ・心やさしいドラマ、音楽と合っていますね。
- ・邦画もやってください。
- ・大変良かったです。次回楽しみです。

## サロン・ド・シネマ

6月・8月・9月の「サロン・ド・シネマ」は、会場のホワイエが大変暑くなるため、開催を中止いたしますのでご了承ください。

午後の部の上映終了後に、2階の活動コーナーにおきましてスタッフの打合せをしています。上映会の運営に関心のある方は、お気軽にご参加下さい。

## 今後の上映予定（毎回木曜日）

- 8月 6日 ★『遠い空の向こうに』
- 9月 17日 『地下室のメロディー』
- 10月 15日 ★『エデンの東』
- 12月 17日 『群衆』
- 1月 21日 『トップ・ハット』
- 2月 18日 『雨の朝パリに死す』

※ 開催日及び上映作品は、変更になる場合があります。  
※ ★はレンタル作品です。

賛助会費の更新も  
受付ます!!



## 「シネマ・ド・リぶら」の賛助サポーター 受付中！ 年間：1口 2,000円から

託児：500円（各回5名まで）  
申込みは、1週間前までに  
市民活動センターへ。

図書館のDVD資料だけでは、無料で上映できる作品が限られています。あなたの賛助で、上映作品の幅が広がります。登録は市民活動センターへ。相談窓口：戸松 070-5333-1842